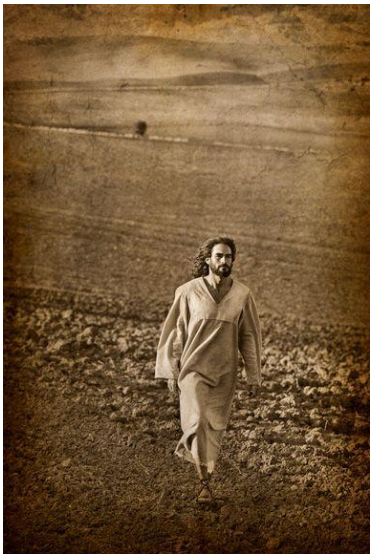
今月のみことば　2016年12月

私たちの聞いたことを、だれが信じたか。主の御腕は、だれに現れたのか。彼は主の前に若枝のように芽ばえ、砂漠の地から出る根のように育った。彼には、私たちが見とれるような姿もなく、輝きもなく、私たちが慕うような見ばえもない。彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。　（イザヤ書　53章1～3節）

ひとりの孤独な生涯

彼は、田舎の女を母として、辺鄙（へんぴ）な村に生まれた。
育ったのは別な村だったが、そこで三十になるまでずっと大工として働いた。
それから、巡回の説教者として三年を過ごした。
一冊の本を書くこともなく、事務所も持ったことはなく、家族も家も持たなかった。
大学へ行ったこともなく、大都会に足を踏み入れたこともなかった。
生まれたところから300キロ以上遠くへ行ったこともなかった。
普通、偉大だとしてほめそやされるようなことは何一つしたこともなかった。
彼には、自分を見てもらう以外に、人に信用してもらうための資格は何もなかった。

まだ三十三歳のときだった。
世間は急に彼を敵視し始めた。友人たちは、みな逃げ去った。
友の一人が裏切ったのである。
彼は敵の手に渡され、茶番としかいいようのない裁判にかけられた。
そして、二人の強盗にはさまれるようにして、十字架に釘づけられた。
彼が間もなく死のうとしているというのに、
処刑者たちは、彼が地上で持っていた唯一の財産、
すなわちその上着が誰のものになるか、くじを引いていた。
彼が死ぬと、その遺体は、彼を憐れに思った友人の配慮で、
その人の墓に横たえられた。



それから1900年の時が過ぎていった。

ところがどうだろう。今日、彼は、人類の中心を占める人物となっている。
かつて進軍したすべての軍隊と、
海を渡ったすべての海軍、開かれたすべての議会と、
統治したすべての王たちを合わせても、
この地上を歩む人類に、あの、ひとりの孤独な生涯ほど影響を与えたものはいまだにない。

（ジェイムズ・A・フランシス）